

ヴァイマル共和国の崩壊とドイツ共産党

斎 藤 哲

ヴァイマル共和国の崩壊を扱う歴史研究は、絶えず、崩壊に責任を負うのはだれか、ナチス独裁に道を開いたのはだれか、労働者階級ないしは労働者政党や労働組合はナチスの政権掌握を阻止できたのではないか、等々の問いを突きつけられてきた。一見して明らかな通り、これらの問いはヴァイマル共和国の崩壊とナチズムの権力掌握とについての政治的、道徳的な評価と密接に関連している。ヴァイマル共和国の後にきたナチズムが歴史にもたらした厄災の大きさを考えるならば、このことは確かに当然のことといえよう。また、こうした問いに関連して、激しい対立関係にあった2つの労働者政党、社会民主党と共産党は、様々な立場からではあるが、ともに激しい非難を浴びせかけられてきた。今このことを共産党について簡単に述べておこう。

統一ドイツ形成以前の西ドイツにおいては、1970年代半ば以降現れてきた社会史的な研究を別とすれば、共産党の極左路線、その反共和国姿勢が労働者勢力の統一を妨げたことが強調され、またそのことがヒトラーの政権掌握を容易にしたということが言われてきた(1)。こうした議論のうちでもっとも最近のものをあげるとすれば、——ドイツ成立以降の研究であるが——32年11月のベルリン交通ストを取り上げたK.R.レーンによる研究があるだろう(2)。ナチズムと共産党との協力関係がヴァイマル共和国の崩壊をもたらしたとする彼の議論は、現在の研究水準から見て、とても学問的議論の対象となるものではないとはいえ、西ドイツにおける共産党研究の一つのあり方を示している。要するに、共産党はナチスの政権掌握にながしかの責任を負うということが、議論の眼目である。

これに対してかつての東ドイツでは、労働者の社会

的権利を擁護する戦い、民主主義を守るための戦い、ファシズムに反対する戦いにおいて共産党の果たした役割が強調され、それらが十分な成果を上げることでできなかった原因として、社会民主党の強い反共産党姿勢が非難されてきた。ここでは共産党は民主的、反ファシズム的、社会主義的な社会主義統一党と、それが支配する民主共和国の直接の源として正当化されてきた(3)。このように東西ドイツいずれにおいても、ヴァイマル共和国の崩壊とナチスによる権力掌握に関する責任追及という視点が、労働者勢力の運動を研究する際には色濃く現れていたのである。要するに、「1933年の労働運動の敗北とファシズムによるその破壊に照らした場合、ヴァイマル期の共産党（と社会民主党）が果たした役割とその政策は、絶えず学問的論争の対象とならざるを得ないばかりか、その論争は政治的価値判断から自由ではあり得ないのである。」(4)。

だがそこでは、かつてH・グレービングが指摘したように、「当時、自己の固有の法則に従って行為していた行為者を、その固有の前提から内在的に理解しようとする」姿勢に欠けるところがあることは否定できない(5)。そうであるならば、ヴァイマル末期の労働運動、とりわけ共産党についての研究が政治的、道徳的評価に陥るのを避けるためには、共産党の運動についての研究を、ナチスによる政権掌握以降の事態についての評価と結びつけるやり方で行うことを避けなければならないだろう。ナチズムの下での厄災の大きさに関する知識は、ヴァイマル末期にその中で当事者たちが決定を下さなければならなかった具体的な状況に対する眼を容易に曇らせてしまいかねないのである。

必要なことは、党の政策体系の全体（＝いわゆる総路線）と全体状況の関係、総路線に基づく個別の方策及び行動とそれを規定する個々の特殊な状況との関係を考慮しながら、ヴァイマル時代末期の共産党にはどのような行動可能性が開かれていたのかを明らかにすることである(6)。

(1) S.Koch-Baumgarten, Einleitung zum "Die KPD in der Weimarer Republik v.O.K.Flecht-heim, Hamburg 1986, S.51.

(2) K.Rainer Roehl, Nahe zum Gegner. Kommunisten und Nationalsozialisten im Berliner BVG-Streik von 1932, 1994 Fr.a.M.

(3) 東ドイツにおける共産党ないしヴァイマル共和国時代の労働運動研究について詳しくは、H. Weber, Kommunismus in Deutschland 1918-1945, Darmstadt 1983.

- (4) R.Lutz, KPD, Weimarer Staat und politische Einheit der Arbeiterbewegung in der Nachkriegskrise 1919-1922/23, Konstanz 1987, S.7. 括弧内は引用者。
- (5) H.Grebing, Flucht vor Hitler? in: Aus Politik und Zeitgeschichte, B/4-5, 1983, S.39.
- (6) Vgl., K. Schönhoven, Strategie des Nichtstuns?, S, 61; in: ders., Reformismus und Radikalismus, Muenchen 1989, S, 162.